先端技術動向

第 48 回国際胚移植学会〔ＩＥＴＳ〕に参加して

開　催　日：令和４年１月 10～13 日
参 加 方 法：オンライン視聴
参加報告者：家畜改良技術研究所技術開発部　森　優賀

１．はじめに

IETS は、世界 13 の国や地域において活動する胚移植学会をつなぐ、繁殖学に関連する学会の中でも権威のある学会の一つであり、その年次大会では家畜や実験動物などのホルモン処置、IVM、IVF、胚発生、卵子凍結保存、胚移植、クローニング、卵母細胞、精子細胞に関連する最新の研究および臨床手順が多数発表される。今回、研究業務を推進するために本学会に出席し、繁殖学の最新の知見を幅広く収集した。

２．概要

本年は OPU-IVF をシンポジウムの主題としてあり、ウシの OPU-IVF について、方法や機器の技術講習及び質疑応答が行われた。OPU について Dr. David Strathman、Dr. Andre Dayan、Dr. Jon Schmidt、Dr. Jerry Matthews、選卵について Ms. Jane Pryor、IVF から凍結保存について Dr. Marcello Rubessa、Dr. Celina Checura、Ms. Sierra A. Long、Dr. PaulaMarchioretto、胚移植について Dr. Luis Nasser、Dr. Brad R. Lindsey と、各分野の第一線でご活躍の方々が登壇されたが、どの方もどの工程においても衛生面や環境ストレスを最適に保つ事など基礎的なことを何よりも重視して作業されていたことが印象的でした。

参考になったのは、どんな農場でも OPU を可能にするため超音波装置や顕微鏡だけでなく枠場やエアシャワーを設置したトレーラー、胸や腰のポケットにチューブを保持することで針からの距離を短くし吸引圧が上がりすぎないようにした工夫、超音波プローブを膣筒で余熱する工夫などが施されている。質疑応答が活発で、小さなことから大きなことまで現場で役立つ情報交流が盛んになされており、会場に同席できなかったことが悔やまれました。日本においても OPU はこれからますます取り入れられ、我々も OPU にはより一層注力していくため、IETS のみならず、OPU 先進国である北米や南米における最新の動向には常にアンテナを張る必要性を感じました。

また、実験動物や家畜を用いて開発・発展された発生生物学的知識や技術を、希少動物であるサイやチーター、サンゴなどに応用することで、生物多様性の維持を目的とする研究が散見されました。環境保全や SDGs が叫ばれる昨今これらにどう貢献できるか考えさせられる内容でした。

報告日：令和４年２月３日